

「シャロームの中に」(ヨハネ二〇章一九〜二三節)

1 イエスの現れ

今日はイースターのあと最初の主日です。復活から一週間がたちます。イエス・キリストは死人の中から甦って、四十日の間、ペトロをはじめとして弟子たちに、またイエスを信じる者たちにご自身を現します。この中に使徒パウロも入っています。彼は復活のイエスとの出会いによってキリスト者となった人です。使徒言行録一章にこう述べてあります。

イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された(一・二三)。

この四十日は特別な四十日、特別な時でした。一度死んだイエスが世に現れた、ですから本来はありえないことが起こっていたのです。その意味で神が、世に現れた時といつでもいいと思います。

このイエスの復活顕現について、福音書はたくさんの情報を与えてくれます。先週のイースターでは私もマルコによる福音書によって空っぽの墓について聞きました。入り口に置かれていたはずの大きな石が転がされていた、墓にイエスの遺体はなかったということです。しかし聖書はこれらの出来事よりもはるかに多くイエスの現れについて語っています。

そのいくつかのことを時間を追ってあげてみると、エマオ途上で二人の弟子に現れたことがルカによる福音書(二四章)にあります。復活した日の午後遅く、夕方にかけてです。二人の弟子が、失意のうちに、エルサレムから少し離れたエマオに向かつて歩いていると途中から加わった人がいます。復活のイエスですが、三人は、この数日エルサレムで起こったことを話題にしながらエマオに向かいます。夕暮れです。二人は、途中加わった人を強いて引き留め、宿に入ります。食事の時、復活のイエスが祈り、パンをさいて渡すと、二人はイエスだと気がつくのです。そして気がついたときその姿はもう見えなくなっていました。二人はすぐにエルサレムに引き返し、事の次第を仲間に伝えます。するとエルサレムに留まっていた弟子たちも、イエスは本当に復活した、そしてペトロに現れたと語っていたというのです。

その日の夕方、同じ頃エルサレムで起こったことが、今日の聖書箇所に記載されていることです。これはこのあと少し取り上げますので、いまは詳しくは申し上げませんが、弟子の一人トマスがそこにおらず、彼が復活のイエスに会うのはそれから一週間後になります(二〇・二六)。

さてヨハネによる福音書二一章には、復活の日のことではありませんが、ガリラヤ湖畔で、ペトロ、ヨハネをはじめとして七人の弟子たちに現れた次第が書いてあります。ペトロは、師であるイエスを失い、どうしようもない空しさをかかえて、わたしは漁に行くといって出かけます。イエスに従うときいったんは捨てた生業にもどらう

としたのです。他の弟子もついていきます。

その晩は何もとれず、すでに夜が明けた頃です。復活のイエスが岸に立っていて舟の右側に降ろしてみなさい、とれるはずだということです。いう通り網を打つてみると引き上げられないほど魚が捕れた。そのとき、それがイエスだと気づいたのはペトロではなくヨハネでした。ペトロはそれを聞くと、裸同然だったので上着をまとって海に飛び込んだということです。ペトロと弟子たちは、陸に上がり、イエスによってすでに用意されていた魚とパンの朝食をイエスとともにした。印象深い、復活のイエスの顕現です。

2 シャロームの中に

さてこうした復活のイエスの現れに関し聖書が注意深く述べているのは、生前のイエスと復活のイエスが同じ方だということです。十字架につけられた方が甦った、甦った方は十字架にかけられた方であった。

エマオ途上の出来事では、宿屋で食事をしたさいに、イエスが祈りパンをさいて渡す、そのしぐさによって二人の弟子はそれがイエスだと気がつきます。生前なさっていたことがいま目の前でくり返される、その時気がつくのです。ガリラヤ湖に戻ったペトロの場合はどうだったかといえば、前夜から何もとれない、しかし言葉ですから、網を降ろしてみましようといつて網を入れると大漁になった。そうです、ペトロがイエスの弟子の招きを受けた時も同じでした（ルカ五章）。集まってきた民への話を終えてイエスが、ペトロに沖にこぎ出し漁をしなさいと語られた、あの時のことがペトロの脳裏にまざまざと甦ってきたのです。

私どもの聖書箇所はどうでしょうか。

その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのある家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。そう言って、手とわき腹とお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ（一九〜二〇節）。

とりあえずはじめに注意したいのは「そう言って」という言葉です。これは、イエスが、平和があるようにといて挨拶して、そのあとすぐに、直ちに、という意味です（ベンゲル）。

復活のイエスが挨拶につづいて最初にしたこと、それは手とわき腹をお見せになること、生前の十字架のイエスであることを示すことでした。そしてそれは紛れもなくあのイエスでした。

しかしここで注意しなければならぬのは、そのことだけではない。イエスの手の釘跡から、槍で刺されたわき腹からも血は流れていないことです。生前のイエスそのままではないのです。現れているのは復活の体です。

復活の体とはどのようなものか、だれにとっても関心のある問いです。のちに使徒

パウロはこの問題を取り上げたときに、そう問う人は「愚かな人だ」（一コリント一五・三六）と書いています。今日はこの問題に深く入ることはいたしません。彼のいつていることは、一言申し上げておかなければならないと思います。彼は、種を蒔くとき私どもが蒔くのは種粒であって、それが成長した姿を現すその実りではないという事実を指摘し、こういいます。「死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれたときには弱いものでも、力強いものに復活するのです」（一五・四二〜四三）。復活のイエスは、たしかに十字架のイエスです。しかしこの十字架のイエスは復活のイエスでもあるのです。

金曜日からすでに三日がたちます。弟子たちは、イエスを見捨て逃げ去った自らの弱さと罪深さを思い、内側から鍵をかけて、潜んでいた。その理由を聖書は「ユダヤ人を恐れて」と書いています。処刑されたイエスに連座することを恐れていたということでしょうか。恐れていたのか、打ちひしがれていたのか、それは私どもには分からない。問題は彼らの思いの内容や反省の程度ではない。そうではなくて、そうしたことを超えて、向こうから、イエスが、イエスのほうから、挨拶の言葉をもって私どものところに来られたということです。そしてすでに私どもの真中に立っておられるということ。そこに私どもに対する憐れみと赦しがあり、招きがあり、召しがあり、救いと喜びがあるのです。

シャロームとは神の平和、神の平安のことです。この言葉が本来使われる場所は挨拶です。こんにちは、さようならの意味で使われます。ある著名な旧約の専門家がシャロームという言葉について、こんな説明をしています。「平和（シャローム）とは平和の挨拶を受ける者がその中に受け入れられ、その中で安全に守られる一つの領域である」（ヴェスターマン）。礼儀として言葉の掛け合いをすること以上の意味がそこにはあります。しかも私どもが注意しなければならないのは、復活のイエスが語っておられることです。この世の言葉として語っているのではない。死の向こう側から、永遠から語っているのです。その神の永遠の平和と平安の中に、平和の挨拶を受ける者は入れられます。

今日の主の日は、教会暦では復活後第一主日だと申しました。「新生」、新しく生まれると呼ばれる日です。新しく生まれるのは、神のシャローム、復活のイエスの平和と平安の中に私どもが入れられ、すでに置かれているということです。平和がないように見えても、平安がないように見えても、苦悩の中にあっても、すでに神の平和はあるのです。その中にすでに置かれているのです。「安らかに信頼していることこそ力がある」（イザヤ三〇・一五）。この神の平和と平安の中にあることに信頼して歩みたいものです。

3 四十日の福音

私どもはみな復活のイエスの挨拶を受け、シャローム、すなわち、神の平和、神の平安の中に置かれています。平和の挨拶を受けた者はしかし、神のシャロームにあず

かるだけではなく、神の平和の証しのために世に遣わされていく者です。

イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」。そう言うてから、彼らに息を吹きかけられて言われた。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」(二一〜二三節)。

復活のイエスはいいます、「わたしもあなたがたを遣わす」と。私どもは遣わされている、世に遣わされている。何のために遣わされるのでしょうか。その使命は何でしょうか。罪を赦すためです。罪を赦すことと赦さないことが、私どもに委ねられているといわれます。しかし赦さないことは私どもの使命には入っていないといっよいでしよう。こうした使命を与えられて世に遣わされているのは、第一には教会です。宣教に生きる教会です。

しかしそれは教会が自らの権能において赦したり赦さなかったりするというものではありません。いうまでもないことです。「世の罪を取り除く神の小羊」(一・二九)はイエス・キリストただひとりです。十字架の死によって死に打ち勝ち、死と死を支配する罪のもとから人を解放したのはイエスです。その復活によって、罪の赦しは高らかに宣言されました。罪の赦しを証しするのが教会です。

そのイエスがいま教会の主としていまし、働いていましたもう。聖霊によって働いていましたもう。「キリストは、そのご生涯を、キリストに従う者たちの生活の中でさらに生きたもう」(ボン・ヘッファー)のです。このキリストの働きにあずかり、これを受け継ぐ、それが教会です。教会はみ言葉の宣教において、伝道において、バプテスマをささげることによって罪の赦しに仕え、それをおこなうのです。そのために遣わされているのです。

教会が、私どもが私どもの力でそうしたことを遂行することは、もちろんできないことです。「聖霊を受けなさい」とはその勧めであり、命令です。聖霊に導かれ、生かされることによってはじめて私どもはイエス・キリストの働きにあずかり、仕えることが許されるのです。

復活のイエスの現れた四十日、特別な時だったと申しました。その特別な時は、イエスが天に上られる(昇天)とともに終わりました。しかしこの四十日は、私どもにとつて約束と希望を意味する時となったのではないのでしょうか。イエスとともに私どもも復活にあずかる時は、世の終わりにもう一度、必ず到来する。それがこの四十日にわたる復活のイエスの顕現の出来事によって開かれ、また保証されたのです。ひとたび可能となったことは必ずなります。世の終わりになります。そうした希望において歩むように、復活のイエスは私どもに語り、命じています。このことが今日私ども聞くべき「四十日の福音」です。